タイトル：2024 年度 教育セミナー（第 20 回）
日時：2024 年 9 月 19 日（木）～22 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

「征服後のマラガと北アフリカ関係史：捕虜返還交渉を手がかりに」
新井梨予（上智大学大学院文学研究科）

四日間にわたる本セミナーでは、先生方や院生の皆様、様々な研究テーマ・問題意識に出会うことができ、自身の視野が広がる非常に有意義な時間でした。私は近世スペイン史を専門としており、西洋史学のゼミに拠点を置いているため、普段接することのない方々とこのように出会えたことに感謝しております。特に、このセミナーをご紹介くださり、イスラームと自身のテーマの関連性が弱いことから参加に二の足を踏んでいた私の背中を押していただいた黒木先生には改めてお礼を申し上げます。

私は本セミナーの最初に報告をさせていただきました。トップバッターということもあり、緊張して臨んだのですが、院生の皆様から多くのご質問をいただくことができうれしく思います。報告の準備段階では、多様な専門を持つ方に聞いていただくということを意識して、普段当たり前に使ってしまっている用語、前提知識をもう一度整理しなおす良い機会にもなりました。また歴史学以外を専門とする方に報告を聞いていただくことで、自分でも気が付いていなかった点や不足していた観点に気付かされました。先生方からは報告内容についてももちろん、報告スライドについてのアドバイスもいただき、大変勉強になりました。そして関連する研究者の方、研究会をご紹介いただくことができ、今回報告をして得られたものは非常に大きいと感じています。

他の院生の皆様のご報告は、現代問題に直結するテーマが多く、情勢に影響される研究の難しさを感じました。普段歴史学の報告を聞くことがほとんどなので、研究上の難しさの多様性を感じる一方、用語の定義付けや史資料・データへのアクセスの問題などの共通点も少なからず見つかり、「研究」ということをより俯瞰的に捉えて考えることのできる時間となりました。

先生方によるセミナーも多岐にわたり興味深く拝聴させていただきました。日本国内にある貴重な外国の未刊行史料、文書館での史料調査の様子といったことから、これまで研究する上で悩み考えられてきたこと、研究に対する姿勢、まさに今持っていらっしゃる問題意識について伺うことができました。どれも非常に具体的なお話でしたが、自身の研究にも引き付けて考えられるものであったと思います。

こうした報告・セミナーの合間の時間にも情報交換をさせていただき、これは対面での開催の醍醐味であると感じます。この四日間のすべての時間が学びの多い刺激的なものでした。現在取り組んでいる修士論文や、今後の研究においても、本セミナーで得たものは活かせることが多いと思います。最初は場違いなのでは、と不安な気持ちが大きかったですが、参加

してよかったと断言できます。

　最後にこのような機会を設けてくださったＡＡ研の皆様、今回ご参加の院生の皆様、先生方に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。